

2025年12月28日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教65「葬りの備え」

詩編23：1～6、ヨハネ12：1～11

「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた」（1節）ここに「過越祭」とあります。過越祭とは、神さまがイスラエルをエジプトからお救いになられる時に、犠牲の子羊の血を塗った家を災いが過越して行ったことを記念する祭りです。そのようにイエスさまが過越の犠牲の子羊としてささげられることによって、わたしたちが受けるべき神さまの裁きが過ぎ越していく。わたしたちが罪の罰を免れることができる。そのためにイエスさまは自ら過越の犠牲となりました。イエスさまが過越祭において十字架におかかりになられるのはまさにそのことを示しています。イエスさまの十字架の死は、その意味で神さまの必然でありました。その御心に従って、イエスさまはエルサレムへと向かわれます。表面的には、イエスさまを亡き者としてユダヤ人たちの陰謀、思惑が働いておりますが、しかしその背後には、そのイエスさまの犠牲によって、わたしたちを罪と死から贖われる神さまの御業が力強く進んでいます。

このベタニアにおける塗油の出来事がイエスさまの十字架の死への備えであることを何より心に留めなければなりません。このことがイエスさまの贖いの死を見据えた出来事であったということです。香油を塗ったマリアがそのことを自覚していたかどうかは分かりませんが、神さまが彼女を用いてそのようになさったのです。この油を注ぐという行為が聖書では特別な意味を持っていました。祭司や王を立てる際にも油が注がれました。キリスト、ヘブライ語でメシアは「油注がれた者」という意味があります。マリアがイエスさまの足に香油を塗ることで、イエスさまをメシア、キリストとして、まことの王として宣言したことになります。それはこの後のエルサレム入城にもかかってきます。それはまことの王としての凱旋であり、罪と死の支配に毅然と立ち向かい、これに勝利される王としての姿がそこに描かれています。

ハイデルベルク信仰問答でキリストの三職（預言者・祭司・王）について教えるところを思い出します。「問31なぜこの方は「キリスト」すなわち「油注がれた者」と呼ばれるのですか。答 なぜなら、この方は父なる神から次のように任職され、聖霊によって油注がれたからです。すなわち、わたしたちの最高の預言者また教師として、わたしたちのあがないに関する神の隠された熟慮と御意志とを、余すところなくわたしたちに啓示し、わたしたちの唯一の大祭司として、御自分の体による唯一の犠牲によってわたしたちをあがない、御父の御前でわたしたちのために絶えず執り成し、わたしたちの永遠の王として、御自分の言葉と霊とによってわたしたちを治め、獲得なさったあがないのもとに、わたしたちを守り保ってくださいるのです。」

何より、わたしたちの人生にはこのようなお方が必要なのです。わたしたちは決して自分の人生を自分で完結することはできません。どんなに優秀な人でも、どんな努力家でも自分で自分の人生を仕上げるなどできない。なぜなら罪があるからです。その罪ゆえにわたしたちは日々神さまに背き続けているのです。溺れている人は自分自身を助けることはできないように、どんなにもがいてもわたしたちはただ罪の中に沈んでいくだけです。誰かにその手を捕まえてもらって引っ張り上げてもらわなければなりません。だからこそ、神さまはイエスさまを救い主として与えてくださいました。イエスさまが罪と死の中に沈んでいくわたしたちをそこから引っ張り上げてくださる。そのためにご自身がこの罪と死の中に入り込んで、十字架で死んでくださった。わたしたちを飲み込もうとしている罪と死の中に自ら飛び込んでくださった。そ

して本当に死なれたのです。それは完全に罪と死に飲み込まれたわたしたちをそこから救い上げるためです。先週はクリスマスを祝いました。何故に神さまの独り子であられるイエスさまがこの世にお生まれになられたのか。それは死ぬためです。死ぬために生まれ、わたしたちを生かすために死んでくださった。「人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピ 2：7～8）イエスさまは、ただ御心に従ってわたしたちのためにそのような苦しい生涯を歩んでくださいました。

神さまがそこまでして救いたいと思われるわたしたちとは一体何者なのでしょう。ルカが伝えるこの塗油の物語では、香油を塗った女性は無名の「罪深い女」としています。このようにあります。「後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った」（ルカ 7：38）これは異様な光景です。この人は一体どんな人生を歩んできたのでしょうか。でも彼女がどういう人生を歩んできて、背負いきれない罪を重ねてきたとしても、それでもその彼女のために、その罪を赦すためにイエスさまは十字架で死んでくださいました。それはまたここにいるイエスさまを裏切ったイスカリオテのユダや、イエスさまを殺そうしているユダヤ人たちのためにも、そして他でないわたしたちのためにもイエスさまは死んでくださったのです。

イエスさまは、罪深い女に言われました。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」（ルカ 7：47）と。この女性の行為はイエスさまによって罪赦された者の最大の愛の業として讃えられました。それは罪ゆえに神さまに顔向けできないわたしたちをただその愛によって赦してくださった、そのために命を捨ててくださった。その神さまの愛に応えて生きる新しい命をそこに芽生えさせたのです。それがこのマリアの行為であり、罪深い女の行為です。そしてこの愛こそ死に打ち勝つよみがえりの命なのです。

これから福音書はエルサレムでのご受難の物語に入っていきます。けれどもそこにはイエスさまの愛が溢れています。13章の弟子たちの足を洗われるところでは「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（13：1）とあります。また15章ではぶどうの木の譬えの中で「わたしの愛にとどまりなさい」（15：9）と言われ、そして「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（15：13）と教えられます。罪と死の闇がわたしたちを覆い尽くそうとするときも、自分には生きる価値があるのかと問うときも、わたしたちはこの神さまの愛によって立つことができます。ナルドのかぐわしい香りがこの部屋を満たしたように、どんなに罪に支配された世の中であろうとも、死の匂いが漂う世の中であろうとも、神さまの愛が全てに優ってわたしたちを満たし、これに打ち勝たせてくださるのです。

天の父よ。ただあなたの愛だけが罪と死に打ち勝ち、そこからわたしたちを救い出してください。どうかあなたの愛の香りでわたしたちを満たしてください。わたしたちもまたこの愛を持って、罪と死の支配に立ち向かうことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。